

# 新型コロナウイルス感染症流行期における 教育実習の学び

筒井 和美<sup>1</sup>、盛本 彩音<sup>1</sup>、黒木 愛梨<sup>1</sup>、木田菜々穂<sup>1</sup>、山本 彩瑛<sup>1</sup>、北島 悟子<sup>2</sup>

1 愛知教育大学 教育学部、2 愛知教育大学 附属高等学校

令和 2 年度の大学 3、4 年生 98 人を対象に教育実習の学びについて Web アンケート調査を実施した。新型コロナウイルス感染症流行期の教育実習には色々な制限があったが、「子どもたちに寄り添える教師になりたい」、「自己の ICT 活用能力や危機管理意識を高めたい」という意見が多く、有意義な実習になった。

<キーワード> 教育実習、教育学部、新型コロナウイルス、COVID-19

## 1. はじめに

教育実習 (5 単位) とは教員養成において「教職に関する科目」に分類され、教員採用や後の現職研修に結びつく高い学びを要する科目である<sup>1)</sup>。教員となる際に必要な基礎的な学修、学校現場や教職に関する実際を体験させる機会の充実、教職課程の質の保証・向上などが求められている。令和 2 年は新型コロナウイルス感染拡大のため<sup>2)</sup>、文部科学省は教育実習の実施に対して同年 5 月 1 日「令和 2 年度における教育実習の実施期間の弾力化について」<sup>3)</sup>を通知し、さらに同年 8 月 11 日「教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令 (令和 2 年第 28 号)」<sup>4)</sup>及び「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許法の特例等に関する法律施行規則の一部を改正する省令等の施行 (令和 2 年第 29 号)」<sup>5)</sup>を公布、施行した。

学校教育では地震や台風などの災害をはじめ、インフルエンザや麻疹の保健予防、食物アレルギーなどに備えた危機管理能力が学級運営において欠かせない<sup>6)</sup>。當山・小川 (2018)<sup>7)</sup>は小中高・特別支援学校の学校管理職者を対象に、学校危機管理として直接的・間接的にこれまで関わった経験についてアンケート調査し、児童や生徒に関わる学校事故や部活動、いじめなどに対する管理経験は比較的多いが、感染症や災害対応についての経験は非常に乏しく、定期的な研修による研鑽が必要であると述べている。宮下ら (2022)<sup>8)</sup>は静岡県が開発した避難所運営ゲーム (HUG) を用いて模擬避難所を体験することで、教育学部の大学生の危機管理意識を高められ、地域との連携強化や早期からの備えが重要であると指摘している。安全、安心な学校生活を送るには、教職員の資質向上のための危機管理能力の育成に関する研修が重要であり、その対象者の中に教育実習生も含まれる。

本調査ではコロナ禍において、教育実習生はどのような体験が得られたか、また、危機管理能力の点でどのような意識変容が見られたかを把握することを目的に Web アンケート調査を実施した。

## 2. 調査方法

### (1) 教育実習に関する Web アンケート調査

令和2年度の教育実習生98人（愛知教育大学 大学3年生59人、大学4年生39人）を対象に、教育実習に関する Web アンケート調査を令和2年1月7日～1月15日に実施した。質問内容は「①教育実習前、あなたは教師志望でしたか」、「②現在、あなたは教師志望ですか」、「③コロナ禍の教育実習で事前感じていたことについて該当するものを選んで下さい（複数選択可）」、「④教育実習期間中に感染対策として自主的に行ったことについて該当するものを選んで下さい（複数選択可）」、「⑤コロナ禍で授業を行う上で困ったことについて該当するものを選んで下さい（複数選択可）」、「⑥児童や生徒と接する上で困ったことについて該当するものを選んで下さい（複数選択可）」、「⑦コロナ禍の教育実習から学んだことはありますか。また、今後、教師としてどのように役立てて行きたいですか」とした。①～⑥は選択とし、⑦は自由記述形式とした。その後、①～⑥を単純集計して対象人数に対する割合をそれぞれ求め、⑦は記述内容から指導、コミュニケーション、危機管理の三つに分類し、それぞれ Fisher の正確確率検定を用いて有意差検定を行い、学年間の影響を調べた。

### (2) 倫理的配慮

国立大学法人愛知教育大学研究倫理規定に従い、回答は自由意志とし、回答を拒否しても何ら不利益は発生しないこと、適切な個人情報の取り扱いを遵守すること等、倫理的配慮を Web アンケートに明示し、研究調査に同意を得た者を対象者とした。

## 3. 調査結果と考察

コロナ禍の教育実習に関する Web アンケート調査の結果を表1に示した。実習先の内訳は、小学校49人（50.0%）、中学校46人（46.9%）、高等学校2人（2.0%）、幼稚園・保育園1人（1.0%）である。

まず、③コロナ禍の教育実習について事前感じていたことについて考察する。「当てはまる」又は「やや当てはまる」を選んだ者の中で「実習先の子どもとコミュニケーションが取れるか不安」が計72人（73.4%）と多く、人々との接触を減らすよう求められる状況下のため、子どもとの適切な接し方がわからない者が多かった（表1）。

④教育実習中に自主的に行った感染対策については、「マスクの着用」や「毎朝の検温」、「手指の消毒」などの基本的な感染対策を行っていた者が7割以上を占めており、感染予防が習慣化している者が多かった。「できる限りソーシャルディスタンスを保った」は39人（39.8%）であり、コロナ禍での実習に不便さを感じている者が存在していた。令和2年6月1日から同年12月31日までの間に、文部科学省に報告のあった新型コロナウイルスに感染した児童生徒数が計6,159人（内訳：小学校2,217人、中学校1,513人、高等学校2,350人、特別支援学校79人）、教職員は計830人であ

表1 コロナ禍の教育実習に関する Web アンケート調査の結果

人 (%)

① 教育実習前、あなたは教員志望でしたか				
	大学3年：n=59	大学4年：n=39	全体：n=98	
とても志望していた	31 (52.5)	26 (66.7)	57 (58.2)	
少し志望していた	19 (32.2)	9 (23.1)	28 (28.6)	
あまり志望していなかった	6 (10.2)	2 (5.1)	8 (8.2)	
全く志望していなかった	3 (5.1)	2 (5.1)	5 (5.1)	
② 現在、あなたは教員志望ですか				
	大学3年：n=59	大学4年：n=39	全体：n=98	
とても志望している	39 (66.1)	28 (71.8)	67 (68.4)	
少し志望している	10 (16.9)	5 (12.8)	15 (15.3)	
あまり志望していない	4 (6.8)	3 (7.7)	7 (7.1)	
全く志望していない	6 (10.2)	3 (7.7)	9 (9.2)	
③ コロナ禍の教育実習で事前感じていたこと (n=98) *				
	当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない
実習先が受け入れてくれるか不安	15 (15.3)	34 (34.7)	32 (32.7)	17 (17.3)
日程が決まらず不安	14 (14.3)	25 (25.5)	27 (27.6)	32 (32.7)
実習までにコロナに感染しないか不安	34 (34.7)	43 (43.9)	12 (12.2)	9 (9.2)
実習先の子どもとコミュニケーションが取れるか不安	31 (31.6)	41 (41.8)	15 (15.3)	11 (11.2)
実習先の指導教員との連絡が取りにくい	8 (8.2)	27 (27.6)	35 (35.7)	28 (28.6)
④ 教育実習期間中に感染対策として自主的に行ったこと*				
	全体：n=98			
毎朝、検温をした	83 (84.7)			
こまめに手指を消毒をした	71 (72.4)			
常にマスクを着用した	96 (98.0)			
フェイスシールドを使用した	4 (4.1)			
休日の外出を控えた	62 (63.3)			
できる限りソーシャルディスタンスを保った	39 (39.8)			
一日に複数回マスクを交換した	2 (2.0)			
⑤ コロナ禍で授業を行う上で困ったこと (n=98) *				
	当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない
グループ学習をしていいのかわからなかった	42 (42.9)	36 (36.7)	8 (8.2)	12 (12.2)
机間指導をしていいのかわからなかった	9 (9.2)	25 (25.5)	39 (39.8)	25 (25.5)
マスク着用にともない声量を上げる必要があった	31 (31.6)	33 (33.7)	22 (22.4)	12 (12.2)
児童生徒の意見が聞き取りにくかった	32 (32.7)	33 (33.7)	21 (21.4)	12 (12.2)
ICT活用授業で機器トラブルが起きた	6 (6.1)	9 (9.2)	34 (34.7)	49 (50.0)
⑥ 児童や生徒と接する上で困ったこと (n=98) *				
	当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない
マスク着用で子どもの表情が読み取りにくかった	51 (52.0)	29 (29.6)	11 (11.2)	7 (7.1)
マスク着用で自分の感情が伝わりにくかった	38 (38.8)	32 (32.7)	18 (18.4)	10 (10.2)
どこまで距離をつめていいのかわからなかった	49 (50.0)	30 (30.6)	12 (12.2)	7 (7.1)
マスク着用で子どもの声が聞き取りにくかった	38 (38.8)	34 (34.7)	18 (18.4)	8 (8.2)
マスク着用で子どもの顔を覚えにくかった	62 (63.3)	16 (16.3)	13 (13.3)	7 (7.1)
コロナ関連の相談が多く、返答に困った	1 (1.0)	4 (4.1)	36 (36.7)	57 (58.2)
感染対策が不十分な子どもへの対応	13 (13.3)	9 (9.2)	33 (33.7)	43 (43.9)

(\*：複数選択可)

り<sup>9)</sup>、文部科学省は基本的な感染対策を継続する「学校の新しい生活様式」を導入するとともに、学習内容や活動内容を工夫しながら子どもの健やかな学びを保障していくことを求めている<sup>10)</sup>。

教育実習中の授業については、⑤コロナ禍で困ったこととして「グループ学習をしていいのかわからなかった」、「机間指導をしていいのかわからなかった」という回答が見られ、ソーシャルディスタンスの確保に苦戦する者が多かった(表1)。GIGA スクール構想や遠隔授業の実施のために ICT 機器の利活用が推奨されているが、アンケート調査では「ICT を活用した授業を行ったが、機器トラブルで使用できなかった」が 15 人(15.3%) 存在し、知識や経験の不足により、使いこなせていない実習生がいると推察された。文部科学省が実施した教員の ICT 活用指導力の調査<sup>11)</sup>によると、ワープロソフトや表計算ソフト等を用いた資料作成やインターネットでの情報収集などの基本的活用は教員の 8 割以上が「できる」又は「ややできる」と回答していたが、児童や生徒が互いの考えを交換し共有して話し合い、協働して資料や作品を制作する学習でコンピューターやソフトウェアの活用を指導できると回答した教員は約 6 割にとどまっている。また、学習用デジタル教科書の使用は「各教科等の授業時数の 2 分の 1 未満」という使用基準が撤廃されたことで<sup>12)</sup>、授業における使用の比重や、授業時間以外の学習における ICT 機器の活用の度合いが高まることが考えられ、教員はより高度な ICT 活用技術の習得や研修が求められる。筒井・綱木(2018)<sup>13)</sup> や筒井ら(2022)<sup>14)</sup> は和食料理のデジタル動画教材を開発しており、教師の指導内容や方法の仕方に沿って柔軟に活用するべきと述べている。

また、「マスク着用にともない声量を上げる必要があった」や「児童生徒の意見が聞き取りにくかった」はともに 6 割を超え(表1)、マスクの着用により発声しづらく、お互いに声が聞き取りにくくなり、円滑に授業を進められなくなっていると考えられた。佐藤ら(2014)<sup>15)</sup> はマスク着用時に「大きく・はっきり・ゆっくり」を意識しても、明確音声が発することが難しいと報告していることから、場合によってはクリアーマスクの使用も必要である。

⑥児童や生徒との接し方で困ったことも同様に、「マスク着用により、子どもの表情が読み取りにくかった」、「マスク着用により、子どもの声が聞き取りにくかった」など、マスクに関連した回答が多かった。表情や唇の動きも見えづらいため、会話の意図が正しく伝わらない恐れもある。感染対策としてマスクの着用が日常化される一方で、教員と児童生徒間の円滑なコミュニケーションの障害になっていると考えられた。

⑦コロナ禍の教育実習から学んだこと、今後、教師として役立てたいことに関する記述があった者は、大学3年生が 59 人中 51 人、大学4年生は 39 人中 35 人であった。その記述内容を学年別に指導、コミュニケーション、危機管理の三項目に分けて分類し、その集計人数とその割合を表2に示した。また、記述内容の一部を抜粋したものを表3に整理した。

大学4年生(n=35)は指導に関する記述が 57.1%を占め、大学3年生(n=51)の 35.3%よりも有意に( $p<0.05$ )その割合が高かった(表2)。危機管理については大学4年生が 31.4%、大学3年生は 39.2%

**表2** 「⑦コロナ禍の教育実習から学んだこと、今後、教師として役立てたいこと」に関する記述内容の分類

	人 (%)	
	大学3年生 : n=51	大学4年生 : n=35
指導*	18 (35.3)	20 (57.1)
コミュニケーション	13 (25.5)	7 (20.0)
危機管理	20 (39.2)	11 (31.4)

\* :  $p < 0.05$

**表3** 「⑦コロナ禍の教育実習から学んだこと、教師として役立てたいこと」に関する記述内容 (一部抜粋)

大学3年生	
指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナに関係なくわかりやすく話したり、指導したりすることが大切ということ。</li> <li>・コロナ禍でも可能なことがあるのだということを学べた。今後の社会がどうなるかわからないが、非常事態の中でも安定した教育活動をしていきたい。</li> <li>・担任の先生がマスクやソーシャルディスタンスを心がけがお手本となっていたと思うので、自分が模範となる行動を示したいと思う。</li> <li>・いろいろなことが制限されている中でも学校生活を楽しもうとする子供達はとてもたくましいと思った。</li> <li>・児童にとってコロナウイルスに対する考え方が様々で、グループ活動を拒否する考えの児童や、逆にマスクをしたがらないような児童もいたので、柔軟な対応をしていかなければならないこと。</li> </ul>
コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・声色や目から相手の感情を読み取る術を学んだ。</li> <li>・マスクをして表情が伝わりづらいため、感情や抑揚は声で伝えることも大事だということ。</li> </ul>
危機管理	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手洗いやうがいの徹底はコロナに限らずインフルエンザ予防にも活かせるので習慣化したい。</li> <li>・このような非常事態に先生方がどのように働いているのかを見ることができたのは学びになった。</li> </ul>
大学4年生	
指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもとたくさん関わりたい中でも密は避けなければならないため、はっきりと注意する意識が大切だと感じた。</li> <li>・コロナで不安を感じ手洗いやうがい、消毒をしないと教室に入れない子どもがいた。子どもの不安を受け入れ寄り添っていくことが必要だと感じた。</li> <li>・対話的な学びの浸透不足を感じた。対話を行わなくても対話“的”な学びは可能である。このコロナ禍こそ、現場の教員が対話的で深い学びを実施し、教育の新たな提供方法を見出す時である。ICT活用について勉学に励みたい。</li> </ul>
コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表情が見えないために言葉での説明だけでは伝わりにくいので、視覚的な情報をもっと増やす必要があると思った。ソーシャルディスタンスを保って子どもたちに接するのが難しいので、直接ではなく、連絡ノートや学級だよりなどに力を入れて、子どもたちとのコミュニケーションの場を少しでも多く取れるようにしたい。</li> <li>・アイコンタクトを取ることの重要性をより感じた。</li> <li>・表情を豊かに使えない分、言葉の重みを痛感した。</li> </ul>
危機管理	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師としての振る舞いが子どもの危機意識につながる。</li> <li>・協力して学校全体で感染予防に取り組むこと。養護教諭として、感染症対策のためのリーダーシップを発揮したい。</li> </ul>

となり、有意差は認められないものの大学4年生の割合は低かった。

記述内容をみると、危機管理について大学4年生には「教師としての振る舞いが子どもの危機意識につながる。」「協力して学校全体で感染予防に取り組むこと。養護教諭として、感染症対策のためのリーダーシップを発揮したい。」などリーダー的存在として高い危機管理について考えている者が多かったが、大学3年生は「手洗いやうがいの徹底はコロナに限らずインフルエンザ予防にも活かせるので習慣化したい。」といった学校全体ではなく、個々の感染予防の意識に留まった者もいた(表3)。

文部科学省(2021)の報告<sup>16)</sup>によると、令和2年度の小・中学校における不登校児童生徒数は計196,127人であり、前年度に比べて1.08倍と多く、児童や生徒に対しより一層の精神的支援が必要とされている。大学4年生には「コロナで不安を感じ手洗いやうがい、消毒をしないと教室に入れない子どもがいた。子どもの不安を受け入れ寄り添っていくことが必要だと感じた。」「表情が見えないために言葉での説明だけでは伝わりにくいので、視覚的な情報をもっと増やす必要があると思った。ソーシャルディスタンスを保って子どもたちに接するのが難しいので、直接ではなく、連絡ノートや学級だよりなどに力を入れて、子どもたちとのコミュニケーションの場を少しでも多く取れるようにしたい。」と回答した者がおり(表3)、児童生徒に寄り添い、今できる支援や手段について考える力が備わり、今後の活躍が期待できる。

最後に、教員志望に関する問いでは、①実習前に「とても志望していた」が98人中57人(大学3年生31人、大学4年生26人)であったが、②実習後は67人(大学3年生39人、大学4年生28人)となり、教育実習を経て教員をより志望するようになった者が計10人増加した(表1)。児玉(2012)<sup>17)</sup>は大学生の職業的発達能力のレベルに関わらず、その能力には教育実習中の指導教員からの支援が最も効果的で、教職志望変化、教職への興味変化と高い相関があると述べている。実習先の指導教員の大きな支援があったからこそ、様々な活動が制限されるコロナ禍でも有意義な教育実習を過ごすことができた。

#### 4. 要約

令和2年度の教育実習生98人を対象に新型コロナウイルス感染症流行期における教育実習に関するWebアンケート調査を実施した。マスク着用のため声が聞き取りづらく、児童や生徒への寄り添い方に関する悩みを抱える実習生が多かったが、コロナ禍ならではの新しい指導方法に目を向けた者もあり、有意義な実習となった。安定した教育活動をするためには、教員養成の段階から危機管理や情報処理の能力を高めることが大切である。

#### 謝辞

アンケート調査にご協力いただいた教育実習生の皆様に心より感謝申し上げます。また、各実習校の教職員の方々に厚く御礼申し上げます。

## 参考文献

- 1) 文部科学省：「学校安全に関する参考資料 ⑩これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」（2016）  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/kenko/anzen/\\_icsFiles/afieldfile/2017/06/13/1383652\\_06.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/anzen/_icsFiles/afieldfile/2017/06/13/1383652_06.pdf)  
（アクセス日：2021年12月27日）
- 2) 筒井和美・黒木愛梨・盛本彩音・木田菜々穂・山本彩瑛：愛知県と福岡県の新型コロナウイルス感染拡大（第1波）にともなう生活の変化に関する調査、食生活研究 41（3）、p.140-152（2021）
- 3) 文部科学省 総合教育政策局：「令和2年度における教育実習の実施期間の弾力化について（令和2年5月1日通知）」  
[https://www.mext.go.jp/content/20200501-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200501-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf)  
（アクセス日：2021年12月27日）
- 4) 文部科学省 総合教育政策局：「教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令の施行について（令和2年8月11日）」  
[https://www.mext.go.jp/content/20200811-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200811-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf)  
（アクセス日：2021年12月27日）
- 5) 文部科学省 総合教育政策局：「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許法の特例等に関する法律施行規則の一部を改正する省令等の施行について（令和2年8月11日）」  
[https://www.mext.go.jp/content/20200811-mxt\\_kyoikujinzai01-000009279\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200811-mxt_kyoikujinzai01-000009279_2.pdf)  
（アクセス日：2021年12月27日）
- 6) 岡本 陽・石原 慎・万代康弘・中島陽一・筒井和美・近藤康人：養護教諭養成課程の大学3年生を対象としたアナフィラキシー緊急時対応トレーニングプログラムに関するパイロットスタディの実施、保健の科学 61（9）、p.641-646（2019）
- 7) 當山清実・小川雄太：学校管理職に求められる危機管理能力に関する一考察、兵庫教育大学研究紀要 5（3）、p.117-124（2018）
- 8) 宮下さくら・田中志歩・筒井和美・板倉厚一：避難所運営ゲーム（HUG）を用いた大学生の危機管理能力の育成、愛知教育大学家政教育講座研究紀要 51、p.1-8（2022）
- 9) 文部科学省 初等中等教育局：「小学校、中学校及び高等学校等における新型コロナウイルス感染症対策の徹底について（令和3年1月5日）」  
[https://www.mext.go.jp/content/20210105-mxt\\_kouhou01-000004520\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210105-mxt_kouhou01-000004520_01.pdf)  
（アクセス日：2021年12月27日）
- 10) 文部科学省 初等中等教育局：『学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル ～「学校の新しい生活様式」～（2021.11.22 Ver.7）』  
[https://www.mext.go.jp/content/20211122-mxt\\_kouhou01-000004520\\_4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20211122-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf)  
（アクセス日：2021年12月27日）
- 11) 文部科学省：「令和2年度学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果（概要）（令和3年3月1日現在）」（2021）  
[https://www.mext.go.jp/content/20211122-mxt\\_shuukyo01-000017176\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20211122-mxt_shuukyo01-000017176_1.pdf)  
（アクセス日：2021年12月27日）
- 12) 文部科学省：「学習者用デジタル教科書の使用を各教科等の授業時数の2分の1に満たないこととする基準の見直しについて（令和2年12月 デジタル教科書の今後の在り方等に関する検討会議）」  
[https://www.mext.go.jp/content/20201224-mxt\\_kyokasyo01-000011895\\_00.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20201224-mxt_kyokasyo01-000011895_00.pdf)  
（アクセス日：2021年12月27日）

- 13) 筒井和美・綱木亮太：家庭科の調理実習における教具と教育効果、愛知教育大学研究報告 芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編 67 (1)、p.43-49 (2018)
- 14) 筒井和美・田岡奈々・杉浦美音：和食伝承のための動画教材の活用とペア指導 一魚介類を用いた煮物料理を題材として、食生活研究 42 (3)、(2022)
- 15) 佐藤成美・山内さつき・高林範子・石井 裕：音声分析によるマスク着用時のコミュニケーション方法についての検討、岡山県立大学保健福祉学部紀要 21、p.45-55 (2014)
- 16) 文部科学省：令和 2 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要 (令和 3 年 10 月 13 日)  
[https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext\\_jidou02-100002753\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf)  
(アクセス日：2021 年 12 月 27 日)
- 17) 児玉真樹子：教職志望変化に及ぼす教育実習の影響過程における「職業的 (進路) 発展にかかわる諸能力」の働き - 社会・認知的キャリア理論の視点から -、教育心理学研究 60、p.261-271 (2012)